

産業遺産紹介 IH-CSIH-076

ボーストリング・トラスの「りんどう橋」と「切立橋」

りんどう橋の所在地：長野県上田市大字御嶽堂4-1地先

切立橋の所在地：福島県会津若松市河東町

長野県上田市丸子の運動公園西にある人道橋、「りんどう橋」は最初九州鉄道（現鹿児島本線）で1891（明治24）年頃架設されていたドイツ・ハーコート社製のボースト・リング橋である。1930（昭和5）年上田鉄道丸子線の千曲川橋梁の一部（英国製鍊鉄ワーレン・トラスなどと共用）に転用されたが1969（昭和44）年に同線廃止となった。1971（昭和46）年、道路橋化し大石橋となる。2001（平成13）年、台風による災害で緊急撤去（1連は保管）され、2007（平成19）年、現在地に移設、「りんどう橋」として竣工した。2024（令和6）年に登録有形文化財として登録された。



【写真1】上地橋梁 （2012/07/07 筆者撮影）

1921（大正10）年、福島県会津若松市河東町の日橋川に、猪苗代第4発電所建設のための広田専用軌道用の日橋川橋梁として移設された。この橋梁は、九州鉄道（現JR九州・鹿児島本線）の矢部川に架かる矢部川橋梁を移設したボーストリング・トラス橋である。工事終了後は保守点検用の道路橋「切立橋」となり、現在も一般に共用されている。



【写真2】切立橋 （2011/08/20 筆者撮影）

ボーストリング・トラスはその名の通り弓と弦（bow+string）の形をしたトラス橋で、ドイツのハーコート社が後進国などへの輸出用として、ピンとボルトで組み立てられるプレハブ橋として製作した。当時11橋、輸入されたが、機関車の重量化など荷重の増加に耐えられず更新された。この2つの橋梁はその内の保存された歴史的に貴重な橋梁である。

（文・写真：田口憲一）

中部産遺研会報 第100号 目次

- | | | |
|---|-------|---|
| 1. 産業遺産紹介／田口憲一 | ----- | 1 |
| 2. ラオスの産業と産業遺産をめぐる（2）ラオス南部の「鍛冶屋村」における新知見／天野武弘 | --- | 2 |
| 3. 第189回定例研究会の概要／山田富久 | ----- | 5 |
| 4. 第191回、第192回定例研究会の案内／夏目勝之 | ----- | 8 |
| 5. 研究会費振込依頼、編集後記、原稿募集 | ----- | 8 |

ラオスの産業と産業遺産をめぐる(2)

ラオス南部の「鍛冶屋村」における鍛冶技術の新知見

New Findings on Blacksmithing in the “Blacksmith Village” in Southern Laos

天野武弘／AMANO, Takehiro

Key Words ; ラオス南部、鍛冶屋村、鍛冶設備、機械ハンマー、鉋

1. はじめに

ラオス南部の中心都市パクセ近郊には、鍛冶屋が多数集中する集落がある。パクセから国道 16 号線沿いに東に位置する 18km 村、19km 村、20km 村（中心都市からの距離で村名を呼称、ここでは合わせて「鍛冶屋村」と呼ぶ）の 3 カ村がそれで、筆者は 2014 年 3 月から 2016 年 8 月までの 3 年余りの間に計 6 回調査に訪れることができ、3 カ村合わせて 101 カ所の鍛冶屋の存在を確認した（文末の参考文献を参照）。



図1 ラオス南部の都市パクセ近郊の「鍛冶屋村」所在地(「Yahoo!地図」に加筆)

20 戸ほどあった（詳細は文末の参考文献）。

2025 年 1 月に 8 年半ぶりに鍛冶屋村に再訪する機会があった。垣間見る程度ではあったが、鍛冶技

術に新たな知見があったので主な点を紹介したい。

2. 機械ハンマーの導入

再訪の目的の一つが、2016 年時点の調査では 1 台も存在しなかった鍛造用の機械である機械ハンマーの導入状況であった。日本の鍛冶屋ではどこも常設する必須の機械であるが、これが全く存在しないことに驚いた記憶がある。鉄を赤めて所要の形に成形する際も、鉄を切断する時も全て人力による加工だったからである。8 年ほど経った時点でどのような状況か、その現状確認を兼ねていた。

最初に訪ねた 18km 村の鍛冶屋で、機械ハンマーの写真を見せながらその存在を伺ったところ、偶然にも国道 16 号線沿いの数軒先の鍛冶屋にあるとの答えが帰ってきた。

(1) 18km村の鍛冶屋に設置の機械ハンマー

早速小走りにその鍛冶屋を訪ねた。そこはこれまで数多く見てきた 4 本柱に簡易な屋根が付いた小屋（木造開放型と呼称）に 1 基の鍛冶炉を持つ鍛冶屋ではなく、鍛冶工場に近い雰囲気を持っていた。排煙用のフードと煙突が繋がる鍛冶炉が 3 基奥に向かって整然と並んでいる。「鍛冶屋村」で初めてみる光景であった。当日は鍛冶職人が 2 人並んで鉋づくりを行っていたが、その鍛冶作業自体は手ハンマーを用いた従来と変わらぬやり方で行われていた。



写真1 鍛冶炉を3基設備する18km村の鍛冶屋、奥に機械ハンマーを設備(2025.1.16筆者撮影)

目的の機械ハンマーについて、写真を提示して訪ねると、鍛冶炉の奥を指さした。目にした瞬間、通常日本で使われる機械ハンマーとは似ても似つかぬ姿に、しばし眺めいつてしまった。構造的には 2 台ともベルトハンマーの一種であろう。通訳不在のなか、1 年前に設置したことまでは分かったが、製作、設置の経緯は聞くことができなかった。

外観より観察するに、1 台は電動機を使用し、板バネ中央部を支点にビーム式になった数枚の板バネとそれに連結するスピンドルとアンビル（金敷）が付設している。日本ではお目に掛かれない構造の機械ハンマーだが、使える状態のようである。もう 1 台は日本のベルトハンマーに似たところはあるものの、電動機とアンビル部分が取り付けいておらず、製作途上か修理中のようであった。



写真2 機械ハンマーを2台設備する18km村の鍛冶屋
(2025.1.16筆者撮影)

2 台の機械の使用状況も聞き取りできなかったものの、かつて何度も見た大ハンマーを使って二人がかりで行っていた素材（主に車の板バネ）の切断作業専用かとも思われた。

二人の鍛冶職人の手際よい鍛冶作業を拝見しつつ、ほかにも機械ハンマーを設備する鍛冶屋があるか否かを、同行のラオス人に翻訳アプリを使って問うてもらった。直ぐに 19km 村にもう 1 ヲ所あるとの情報が得られた。

（2）19km村の鍛冶屋に設置の機械ハンマー

再び車を走らせ、19m 村に向かう。国道 16 号線から村内に 100m 余り入った所に鍛冶屋があり、吹きさらしの屋根だけ持つ鍛冶工房（通常はこの形の鍛冶屋が圧倒的に多い）に機械ハンマーが設置されていた。

こちらも機械ハンマーは動いておらず鍛冶作業は休日で当主は留守であったが、家人から話を聞くことができた。といってもカタコトの日本語が分かるラオス人を通じての会話であり、設置経緯や使用状況の詳細までは聞き取れなかったものの、3 年前に



写真3 機械ハンマーを1台設備する19km村の鍛冶屋
(2025.1.16筆者撮影)

機械ハンマーを導入したことが分かった。電動機は使わないときは盗難防止のため外してあるとのことであった。

機械ハンマーの構造は、こちらもビーム式になった板バネの片方に電動機とベルト掛けで駆動するクランク、もう片方にスピンドルとアンビルが付く方式である。18km 村の鍛冶屋に設置のビーム式ベルトハンマーと構造は同じであるが、こちらの方が頑丈な造りとなっている。

機械ハンマーのクランク側のベルト車を手で回すことができ、その動きを確認することができた。板バネの力を借りて、ベルトハンマー同様に手打ちに近い槌打ちができるように感じた。

この機械ハンマーは 3 ヲ村の「鍛冶屋村」で最初の導入とも聴くが、詳細までは聞き取れなかった。また 18km 村のものと合わせ、「鍛冶屋村」ではまだ 2 ヲ所のみ設置であることが分かった。ようやく機械ハンマーが導入されたものの、「鍛冶屋村」ではまだ様子見の状況と窺えた。

3. 「鍛冶屋村」の鍛冶技術

ー再訪時に気付いた点を中心にー

今回 8 年ぶりに「鍛冶屋村」に再訪し、目的の最大であった機械ハンマー導入の実状を垣間見ることができた。また鉋づくりが主要な鍛冶製品であることは変わりなく、手作業を中心とする鍛冶技術も特に変わりはないことも分かった。2014 年に最初にこの地を訪れたとき、衝撃的な記憶として残ったベトナム戦争時の砲弾を利用した金敷は今も変わらずこの鍛冶屋でも当たり前の設備として使われていた。鍛冶炉も機械ハンマーが 2 台ある鍛冶屋では改良したフード付きの排煙装置が設備されていたが、拝見した何ヶ所かの鍛冶屋では 8 年前とほぼ変わらず、送風機による簡易な鍛冶炉に木炭燃料を使用し、鉋づくりに励んでいた。時には鍛冶仲間か息子か弟



写真4 手打ちによる鉋づくり、金敷に砲弾を利用、簡易な鍛冶炉と鍛冶作業の状況は8年前と不変(2025.1.16筆者撮影)

子による二人がかりの鍛冶作業も行われていた。

鍛冶技術で 8 年前と変わった点も少し気付いた。

1 点目は、鉋の素材が従来はどの鍛冶屋もトラックなどを廃車した車の板バネを使用していたが、今回訪問した何ヵ所かの鍛冶屋を見回した範囲では、市販と思われる帯鋼おびこう(細長く帯状に圧延された鋼材)が使われていたことである。板バネの場合は、大き目のものだとし長さ、幅、厚さが 630×73×9mm あり、これを長さ方向を小割りに切断して 12 ～ 16 枚の鉋の素材としていた。その切断ではタガネと大ハンマーによる人力で行っていた。この作業を以前の「鍛冶屋村」調査では何度も見ていたが、体力を消耗する厳しい作業でもあり、機械ハンマー導入の必要を大きく感じたところでもあった。しかし帯鋼であれば、長さ方向の切断だけで済み、作業の軽減となる。これが浸透しているようでもあった。

2 点目は、量産化が以前に増して進んでいると感じたことである。当時の調査でも板バネを切断した数だけ分業的に工程ごとの作業が見られたが、帯鋼使用により、より分業化がしやすくなり、量産化が進んでいる様子が見られた。



写真5 二つの砲弾を利用した金敷での作業、鍛冶炉の下に量産用と思われる加工中の鉋が並ぶ(2025.1.16筆者撮影)

そして、鍛冶技術ではないが、村の様子が以前と変わっている点も気になった。2016 年調査時点まで

は、101 ヵ所の鍛冶屋のうち半数近くの 46 ヵ所が国道 16 号線沿いに鍛冶工房や店を構えていたが、その数がだいぶ少なくなっていると感じたことである。それを現地で質問すると、鍛冶屋の数がかつての 4 割ほど減の 60 ヵ所ほどに減少しているとのことであ

った。詳しく理由を聞けなかったが、需要の減少と村内にあ



写真6 国道沿いの鍛冶屋の一例、鉋など販売を兼ねる鍛冶屋が多い(2025.1.16筆者撮影)

ル工場の拡張に伴う転職もあるように思えた。

需要減については、「鍛冶屋村」から 20km ほど離れたパクセの中心市街地に、巨大な「ダオハン市場」があり、食料品、衣類、日用品などが広く販売され、鉋などを売る金物屋も何軒か存在する。そこには鉋も大量に置かれていた。多くは低価格の量産品だったことを覚えている。こうした格安の量産品も圧迫の一因と思われる。

しかし、「鍛冶屋村」の鉋は、地元では砥石を当てれば長く使い続けられる、との評判を何ヵ所かで聞いてきた。質の良い手作り品だからこそであろう。その灯を消さずに、連綿と継続されることを願いながら「鍛冶屋村」をあとにした。

今回の再調査ではラオス VHA 社員のセン氏に運転、通訳含めお世話になった。御礼を申し上げます。

【参考文献】

- 1)天野武弘「ラオス南部の鍛冶技術の一断面」『日本機械学会学会 2015 年年次大会講演論文集』2015 年 9 月、CD 版、No.15-1。
- 2)天野武弘「ラオス南部地域における鍛冶技術—鉋づくりを事例として—」『日本機械学会学会 2016 年度年次大会講演論文集』2016 年 9 月、CD 版、No.16-1。
- 3)天野武弘「ラオス南部地域の「鍛冶屋村」における 101 ヵ所の鍛冶屋と鍛冶技術」『年報／中部の経済と社会 (2016 年版)』愛知大学中部地方産業研究所、2017 年 3 月、143 ～ 155 頁。
- 1)天野武弘「鍛冶屋村」『ラオス南部地域の社会と産業そして人』シンプリブックス、2017 年 3 月、47 ～ 66 頁。

第189回定例研究会の概要

山田 富久／YAMADA, Tomihisai

日時：2025年7月27日（日）13:00～17:00

会場：名古屋市市民活動推進センター

参加：18名

司会：山田貢 記録：山田富久

1. 研究報告、調査報告

[189-11-01]「スペイン・ビルバオの産業遺産を訪ねて」／大田博行

ビルバオはスペイン北部の中央部に位置しており、大西洋のビスケー湾からネルビオン川を19km遡った位置にある。このビルバオを訪ねた、次の2つの産業遺産について紹介した。

(1) 世界遺産「ビスカヤ橋」 Puente de Viskaya

1893年にビルバオの河口に建設された世界初の運搬橋を訪問、渡河体験時の動画と写真で紹介した。同形式の運搬橋は世界中で約20基建設されたが、現存するのはわずか8か所のみとなった。交通インフラの役割の他に観光資源としても活用されている。

ビスカヤ橋は、長さ160m、高さ45m ゴンドラ運搬能力160人、車6台である。



世界遺産「ビスカヤ橋」 (2025/03/22 筆者撮影)

(2) ビスカヤ高炉製鉄所 (Altos Hornos de Viskaya) の第一高炉

Alto horno No.1 of Altos Hornos de Viskaya

ビルバオにあるアルトス・ホルノス製鉄所の第一高炉は1959年製の近代高炉でドイツ GGH(Gute Hoff-nungs Hütte)社製（官営八幡製鉄所の高炉と同じ



アルトス・ホルノス製鉄所の第一高炉
(public domain)

メーカー）である・

アルトス・ホルノス・デ・ビスカヤ（AHV）社は1901年にこの地で創業したスペイン最大の高炉メーカーであった。1995年に第一高炉は廃炉となった。現在、スペイン文化遺産研究所により保存展示修復プログラムが進行中である。（大田博行記）

[189-11-02]「ドイツのルール地方産業文化ルートの鉱山の現状と保存、活用状況」／オリバー・マイヤー

ドイツ、ルール地方の産業文化ルート die Route der Industriekultur は、ルール地方協会 Regionalverbandes Ruhr(RVR)のプロジェクトで、ルール地方に点在する鉱山や製鉄所の遺構など産業遺産を産業文化という観光テーマルートとして結んだ観光情報ネットワークである。今日では、欧州最大の文化ネットワーク、ヨーロッパ産業遺産ルートERIHの一部になっている。



【写真1】 ミニスター・シュタイン炭鉱の立坑櫓
(2023/03/28 Mayer撮影)

ルール地方の産業文化ルート内には、世界遺産になっているツォルフェライン炭砒Zeche Zollverein、ドルトムントのツォレルン炭砒Ⅱ/ⅣZeche Zollern Ⅱ/Ⅳがあるが、本稿では、それ以外のあまり知られていない次の6つの鉱山とコークス製造工場の現状、保存と活用状況について報告した。



〔写真2〕 エーバルト炭砒の立坑櫓
(2023/03/22 Mayer撮影)



〔写真3〕 ヴァルトロップ炭砒の建物と立坑櫓の
巻上機大輪 (2023/03/22 Mayer撮影)



〔写真4〕 フリードリッヒ・ハインリッヒ炭砒
の立坑櫓 (2023/03/24 Mayer撮影)

- (1) Zeche Minister Stein, Dortmund
ミンスター・シュタイン炭砒 (ドルトムント市)
- (2) Zeche Hannover, Bochum
ハノーファー炭砒 (ボーフム市)

- (3) Zeche Nordstern, Gelsenkirchen
ノルトシュテルン炭砒 (ゲルゼンキルヒェン市)
- (4) Zeche Ewald, Herten
エーヴァルト炭砒 (ヘルテン町)
- (5) Zeche Waltrop, Waltrop
ヴァルトロップ炭砒 (ヴァルトロップ町)
- (6) Zeche Friedrich Heinrich, Kamp-Lintfort
フリードリヒ＝ハインリッヒ炭砒
(キャンプ＝リントフォルト町)
- (7) Kokerei Hansa, Dortmund
ハンザコークス工場 (ドルトムント市)

(石田正治記)

〔189-11-03〕産業遺産研究合評会 (試行) / 石田正治・浅野伸一

中部産業遺産研究会定例研究会の初の試みとして、掲載記事についての合評会が開催された。今回は、『産業遺産研究』第32号に掲載された浅野伸一会員の研究ノート「産業遺産研究を巡る一視点」をもとに産業遺産の概念や産業遺産研究の方法論と研究方法について議論すべく、浅野会員より研究ノートの試論について説明があった。これを受けてコメンテーターの天野武弘会員より浅野会員の研究ノートに見られる問題意識について解説された。そして、産業遺産の概念について、TICCIHのニジニー・タギル憲章の定義、中部産業遺産研究会の産業遺産の概念、産業遺産学会の産業遺産の概念について解説された。その他、産業遺産の保存活用の問題、産業遺産の研究方法論など多岐にわたる論点が提示された。

会場の会員から質問・意見・感想など多数のコメントが寄せられた。

合評会の詳細については、『産業遺産研究』誌に掲載の予定。
(石田正治記)

2. その他諸報告、保存問題など

〔189-22-01〕トピックス (産業遺産に関する話題・近況など)

・一宮市三岸節子記念美術館「のこぎり屋根アートと吉田家のレンガ工場」展

開催期間 2025/7/19～8/31

節子の実家・吉田家が経営する吉田織産 (合資) の毛織物工場 (建物) に使われたと推定される煉瓦が見つかり、展示されている。会員の水野信太郎は、大正前半期に造られ積まれた煉瓦だと鑑定。会員の岩井章真は本企画に関わり、図録に詳細な調査報告を載せている。

・上石津時水力発電所、発電事業中止

2024年6月の降雨による導水路崩落により発電事業を開始することは困難となった。令和7年度中は事業継承先を模索。

3. 研究誌、会報（研究会ニュースレター）

[189-31-01]研究誌『産業遺産研究第32号』の配付について／石田正治

なし

[189-31-02]会報ニュースレター 電子メール版について／橋本英樹

なし

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

[189-41-01]シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第42回／八田健一郎

- ・テーマを「矢作川のめぐみ今昔」で決定。
- ・開始時期は、来年3月中旬頃で、基調報告候補の都合により決める。会場はとよた市民活動センター。
- ・今井貯木場、明治用水などを取り上げる（質問のあった発電所については、検討して決める）

[189-41-02]パネル展と講演会／富成一也・渡辺治男
テーマ「大正ロマン、昭和レトロのものがたりⅢ」
展示期間：2026年2月3日（火）～2月23日（月）
場 所：名古屋都市センター、まちづくり広場
講演会：2026年2月15日（日）
＜別紙参照＞

- ・通常の展示パネルとは別に、特別企画パネル「昭和100年の軌跡」を設定する。写真4～8枚を中心とする展示で、9テーマを決めた。
- ・講演会（3回）と実物展示を決定。実物展示は、前回の反省（展示物が小さく見にくい）を活かす。

[189-41-03]当会発行書籍等の電子化／石田正治
「資料のデジタル化と保存・公開に関する委員会」の設置について資料のデジタル化保存と公開について検討していくこととした。

[189-41-06]WEBサイトの運営と管理／岩井章真
・なし

5. 見学会、その他の催し物 案内

[189-51-01]9月実施予定の見学会「西三河足助方面の産業遺産を歩く」／浅野伸一

- ・期日 2025年9月27日（土）
- ・定員25名に対し14～15名集まった。あと10名募集中で、7月末に締め切る。

6. 文献紹介、資料紹介 （ ）内は紹介者

【参考文献】

[189-61-01]岩瀬彰利編『もしかしてこんな愛知だった？』風媒社（石田正治）

購入希望者は石田まで、著者割引でお渡しします。

【その他の資料】（事務局）

[189-61-03]「KINIAS ニュースレター」近畿産業考古学会 回覧

[189-61-04]「ニュースレター」東京産業遺産学会

[189-61-05]「九州産業考古学会報」九州産業考古学会

7. その他の出版広報事業

8. 役員会等

[189-81-01]幹事会・役員会等／事務局

- ・必要の都度メールで実施

9. 事務局関係

[189-91-01]会員異動（前回の定例研究会以降）／事務局

入会（敬称略）： 本田博志（6月2日付）

退会（敬称略）： なし

[189-91-02]2025年度会費納入のお願い／事務局
年会費：4000円

【郵便局のゆうちょ銀行ATMから振込の場合】

口座記号・口座番号 00810-9-138886

口座名義 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキュウカイ
（郵便局のATMの近くに置いてある青色の振替用紙をご利用下さい）

【ゆうちょ銀行以外から振り込む場合】

ゆうちょ銀行 ○八九店 当座 138886

口座名義 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキュウカイ
問合窓口：会計担当 加藤真司

ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

[189-91-03]書籍・資料等交換会／事務局

会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引き継ぎます。今回はなし。

[189-91-04]研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局
2025年

07/27（日） 第189回定例研究会 名古屋市市民活動推進センター集会室 13:00～
 09/27（土） 第190回 見学会 名鉄豊田新線梅坪駅改札口集合 9:30
 11/**（*） 第191回定例研究会（日時、会場未定）

第191回定例研究会 案 内

期 日：2025年11月23日（日）13:00～17:00
 会 場：とよた市民活動センター
 豊田市若宮町1丁目57番地1 T-FACE A館9階
 アクセス：名鉄三河線・豊田市駅下車、西口を出てすぐ。愛知環状鉄道・新豊田駅下車、徒歩3分。
 ※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局担当宛ご連絡ください。
 夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>
 山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

第192回定例研究会 案 内

期 日：2026年1月25日（日）13:00～17:00
 会 場：名古屋市市民活動推進センターに申請中
 アクセス：地下鉄名城線・矢場町駅下車、徒歩5分
 ※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局担当宛ご連絡ください。
 夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>
 山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

2025年度年会費ご入金お願い

1. 年会費 4,000円
 2. 振替、振込口座 ゆうちょ銀行
 - ゆうちょ銀行より振替
 - 座番号 00810-9-138886
 - 座名 中部産業遺産研究会
 - チュウブサンギョウイサンケンキョウカイ
 - 他銀行からの振込
 - ゆうちょ銀行 ○八九店
 - 当座預金 138886
 - 座名 中部産業遺産研究会
 - チュウブサンギョウイサンケンキョウカイ
- ※ 2024 年度年会費、未納の方は、合わせてお振り込み下さい。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

この会報は、記念すべき100号となりました。さらなる誌面の充実を目指して、会員諸氏の積極的な投稿を期待しています。

予定していた新企画「産業の記念碑めぐり」シリーズは、次回より開始する予定です。多くの会員の投稿をお願いします。（石田）

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見などお気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメモを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp

第101号の原稿締切日：2025/12/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第101号（2026/01/15） 第102号（2026/04/15）

第103号（2026/07/15） 第104号（2026/10/15）



中部産遺研会報 第100号

ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.100

発行日：2025年10月20日

編集委員：石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子・夏目勝之
 中部産業遺産研究会事務局：

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194 山田 貢 方

中部産業遺産研究会のホームページ <https://csih.sakura.ne.jp/>

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2024, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.